

21 感染症に対抗する「喫茶養生」実践者の歴史的考察

白井 宗佐

武蔵野学院大学大学院博士後期3年

『喫茶養生記』において栄西は、宋の人々の健康に対する考え方や行動を観察した結果、「昔、醫方不添削而治。今人、斟酌寡者歟」と批判的な見解を示している。すなわち、疾病は、昔の人のように罹る前に治すべきであるという養生の根本的思想を強調し、生理的側面からの喫茶養生を推奨しているのである。栄西以降の時代に禅僧ならびに茶人たちは、結果的にこれを実践したことになった。本稿では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と同じく世界を恐怖に陥れた19世紀のコレラ流行期ならびに20世紀のスペイン風邪流行期における代表的茶人108人の疾患状況（持病と死因）を調査・整理してみたい。

調査結果をまとめると、次の8点に要約される。

- ・感染症流行期に死亡しなかった茶人は101人。調査した茶人の93.5%が、ワクチンと特効薬のない時代に死の病と恐れられた感染症流行期を生き延びた。
- ・コレラ第1次流行の1817年8月～1826年に死亡した茶人は1人（松平治郷）。
- ・コレラ第2次（1829年～1852年）は死亡者無し。
- ・コレラ第3次（1852年～1853年）は死亡者無し。
- ・コレラ第4次（1863年～1875年）は死亡者1人（井伊直弼は暗殺）。
- ・コレラ第5次（1881年～1896年）は死亡者1人（松平容保）。
- ・コレラ第6次（1899年～1926年）は死亡者1人（富岡鉄斎）。
- ・スペイン風邪流行期（1918年～1920年）は死亡者3人。近藤廉平の死因はスペイン風邪の記録がある。三井高弘は持病の腎臓炎、広岡浅子も腎臓炎が死因で、いずれもスペイン風邪の罹患・発症が疑われる（内務省衛生局が1927年に刊行した「流行性感冒」は、腎臓炎等の合併症について報告している。また『鳥取新報』1918年10月31日付「今度の感冒」は「気管支カタルや肺炎、腎臓炎等の合併症を起こさぬように、過酸化水素を溶解したもので含嗽（がんそう）するのは健康者には予防にもなる」と報じている）。

この内スペイン風邪の世界的流行は、21世紀と同じくこの感染症日本でも猛威を振るい、多くの日本人が落命した。内務省衛生局「流行性感冒」（1927年）によれば、日本人の罹患者数は2380万4673人、死亡者数は38万8727人に上り、死亡率（死亡者数÷罹患者数）は1.63%を記録した。第1波（1918年8月～1919年7月）は罹患者数2116万8398人、死亡者数25万7363人で、罹患者数は全期間の89%、死亡者数は66%を占める。続く第2波（1919年9月～1920年7月）は罹患者数241万2097人、死亡者数12万7666人と減少傾向に見えるが、第1波の死亡率1.2%に対し、第2波は5.3%と4倍強も増加し、悪化した。

こうした未曾有の事態において、調査対象の茶人の内、罹患により落命したと考えられるのは3人だけである。当時の茶人の多くは上層階級であることから感染症予防の生活環境が一般家庭より整っていた等の優位な面を考慮しても、罹患記録が残らない者を含めた大多数の茶人がパンデミックを生き抜いたことは事実である。その理由の一つとして、喫茶養生が感染症罹患の回避、罹患後の回復や再罹患の予防等において功を奏した可能性を追究する価値があるのではないだろうか。

なぜなら、現代においてもCOVID-19に罹患したある茶人は、症状が軽微で薬剤の投与無く約2週間で完治したのである。この茶人は毎朝大服一杯の喫茶習慣があり、月平均100グラムの抹茶に加え多量の緑茶を摂取する。茶人の喫茶習慣と疾患の予防・回復との因果関係は厳密には証明されていないが、感染症に対抗し命を保つには「罹患後、早期に回復する自己免疫力が重要である」という原則が導かれるのではないだろうか。